

情報共有

本店 5/6 AMルクメモ

東京電力(株)

(4枚)

(非管理メモ)

本店レク 議事メモ

日時：平成23年5月6日(金) 11:00~11:40

場所：東京電力本店3階AB会議室

先方：記者約50名(カメラ5台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

原子力設備管理部 原子力耐震技術センター

広報部

配付資料

- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて(5月6日 午前9時現在)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ(5月6日 6:00 現在)
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 他
- ・ 福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況
- ・ 柏崎刈羽原子力発電所における不適合処理・運転保守状況について
(1号機残留熱除去系電動弁の不具合について)

質疑：

Q. 局所排風機設置作業における作業員の被ばく線量については、速報値で2.8 mSvであったが、実際の測定結果はいくつか。

A. 確定値については、最高で3.16mSv/h、最小で0.31 mSv/hであった。

<作業員構成および93mSv/hの測定結果について、補足説明>

○ 作業員に50歳代が多い理由は、限られた時間の中での実施のため現場作業に精髄した技術をもっている人間を選択した結果。年齢を基準に作業員を選定した訳ではない。

○ また93mSv/hの測定箇所は、以前パックポットで計測した1,120~1,200mSvの扉部分ではなく、そこから離れた箇所での測定結果であり、SHCポンプ室入り口付近のデータである。

Q. 最高値3.16mSv/hは、当初計画した線量を超えているが問題ないのか。

A. 当初3 mSv/h程度で作業できると考えていたもので、作業の最大計画値としてのAPD警報設定値は20mSv/hであったことを踏まえると問題ない範囲内で作業が達成できたと考えている。

Q. 0.31 mSv/h~3.16 mSv/hという値は、作業員18人全員の測定値か。

A. 13人全員の内訳が出てきていないので、確認させていただく。

Q. 作業員の原子炉建屋内に滞在していた最長時間は。

A. 確認させていただく。

Q. 核種分析の生データをホームページで公開しない理由は。

A. JAEA と日本分析センターによる第三者の確認が出来ており、その結果を取り纏めて公表することで、公正さは保たれていると考える。

Q. その方法で利用者は納得するのか。

A. 当社としてこのような情報提供をさせて頂いているということ。

Q. これまでの事故対応にかかっている費用は。

A. 費用の算定はできていない。

Q. 道筋通り作業が進んだ場合にかかる費用想定は。また補償額の見込みは。

A. いずれも決まったものはない。

Q. 東電は年間広告費は。

A. 確認させていただく。

Q. 今後3年以内に電気料金を上げる考えはあるのか。

A. 経営課題の一つと考えているが、具体的には未定。

Q. 1号機原子炉への注水量を、6 m³/h から8 m³/hに変更した理由は。

A. 道筋に従って、原子炉の状態をより安定的な冷却状態とするために、燃料集合体上部が冠水するまで水を入れることを考えている。今回6 m³/h から8 m³/h に注水量を上げることで原子炉内の水位をあげていく。昨日、保安院から報告聴取を受け、報告書を提出したが、保安院からの指示を守りながら、実施して参りたい。

Q. 注水量を上げることで大気圧まで圧力低下する懸念はあるのか。

A. 前回注水量を10 m³/h に上げた際は、温度、圧力の低下が大きかった。8 m³/h での注水量でパラメータがどう変化するのか注視していきたいと考えている。

Q. 1号機原子炉建屋の2階や地下の線量はどのように測定するのか。

A. 現時点では決まっていない。バックボットは階段を上れるが、建屋の状況が改善されることで、人が線量を計りながら接近することも可能と考えている。実行する段階で改めてご報告させて頂く。

Q. 2、3号機についても1号機同様換気を実施してから建屋内部に入るのか。

A. 2、3号機の調査内容、スケジュールは現状決まっていない。

Q. 3, 4号機の最新の建屋内の線量データは。

A. 3号機についてはバックボットでの計測データが最新値と思うが、4号機の値を含めて確認させていただく。

Q. 昨日計測した1号機のダスト濃度の数値は、提示できないのか。

A. 午後の会見でお知らせさせていただきたい。

Q. 3号機の原子炉内部温度が上昇傾向であるが、これについての評価は。

A. 温度は上がり気味であるが、温度以外のパラメータについては変動がない状況であり、現在確認中である。引続きパラメータを注視し、注水量を変化させることも含めて考えていきたい。

Q. その判断はいつ実施するのか。

A. 一両日中に行う。

Q. 注水量増加により圧力が下がりすぎることも考えているのか。

A. 3号機の格納容器の圧力については既に大気圧の状態であり水蒸気が凝縮することとは考えにくいですが、温度については引続き注視する必要があると考えている。

Q. 1号機の冠水実施に関する報告書内において、建屋内の滞留水の影響評価の項目があるが、その中で水が漏洩した場合の水位の上昇は、OPで10,127mmであり開口部10,200mmから漏水することはない、タービン建屋の水位についてはOPで3,958mmであり開口部4,000mmから漏洩することはない、といった判断を実施しているが、どうしてここまで詳細な数値評価ができたのか。

A. 各値については計算値である。計算の一例として、漏水量は $6\text{ m}^3/\text{h}$ であり、丸25日間では $3,600\text{ m}^3$ の漏洩量、原子炉建屋の有効面積が $1,320\text{ m}^2$ であることから、 $3,600/1,320=2.727\text{ m}$ の水位上昇となる。原子炉水位はOPで7,400mmであり、その結果、水位上昇はOPで10,127mmという結果が出ている。

Q. 25日とは具体的にいつの期間か。

A. 5月6日から6月1日までの25日間。

Q. なぜ25日で実施したのか。

A. 25日間で徐々に漏洩するケース、冠水後一度に漏洩する2パターンで計算を実施している。漏洩による水位上昇はOPで9,090mmであり開口部に対する余裕があるという結果が出ている。詳細については、後程皆さんに報告書の開示をしたいと考えているものの、現在準備中であるため暫くお待ち頂きたい。

Q. 1号機冠水の報告書について、圧力抑制室を支える支柱が想定を超える地震が発生した際には支柱が曲がるのではと保安院が指摘しているが、どうか。

A. 今回、格納容器・圧力抑制室の健全性は、これまでの基準地震動にて評価している。圧力抑制室外側の支柱は、これまでの基準地震動に対して92.8%と評価している。したがって、基準地震動を上回る地震が発生した際について、もう少し検討するように指示を受けたところ。ただし評価を保守的に見ていること等から実力値としてはもう少しあると思っている。どのような補強をするかについては検討し、できるものがあれば実施してまいりたい。

Q. 注水量を8m³に増やした際、20日程度で冠水するとのことだが、その根拠は、フラスコ赤道部分に水がある前提と言うことか。

A. その通り。

Q. 水位計の校正作業はいつになりそうか。

A. 8日に二重扉の開放と現場の確認に入ることから、来週あたりには水位計の構成を実施できるのではないかと考えている。

Q. 勝俣会長と清水社長は本日出社しているのか。

A. 出社している。

Q. 1号機支柱による補強作業の実施時期は。冠水までに実施できるのか。

A. 支柱による補強作業は冠水作業とは切り離して考えている。現時点では、冠水させ、より安定的な冷却状態に持って行くことを優先しており、支柱はこれから設計を始める段階であり、冠水作業の間に設計から施工まで行うのは肯定的に難しいと考えている。

Q. 最大値である3.16mSvと最小値0.31mSvを被ばくした作業員の作業内容は。また、3mSvを超えた人は何人いるのか。

A. いずれもダクトの配置に携わった作業員である。また、3mSvを超えた作業員は現時点で1名であることを把握している。

Q. 昨日のダクト配置作業の具体的な内容は。

A. 確認中。

Q. 腐食に対して薬品を投入するとのことだが、具体的な薬品や投入時期は。

A. 海水を注入した関係で、塩素に対する腐食を懸念しており、その対応を考えているところ。どの薬品をどのタイミングで投入するかは、検討中である。

以上